琴浦町赤碕菊港「波しぐれ三度笠」物語

波しぐれの菊港

「いかん！　船が流されるー！」

「この遠浅の八橋沖の船がかりじゃあ、西風が防げず、砂浜でイカリも効かねえ…」

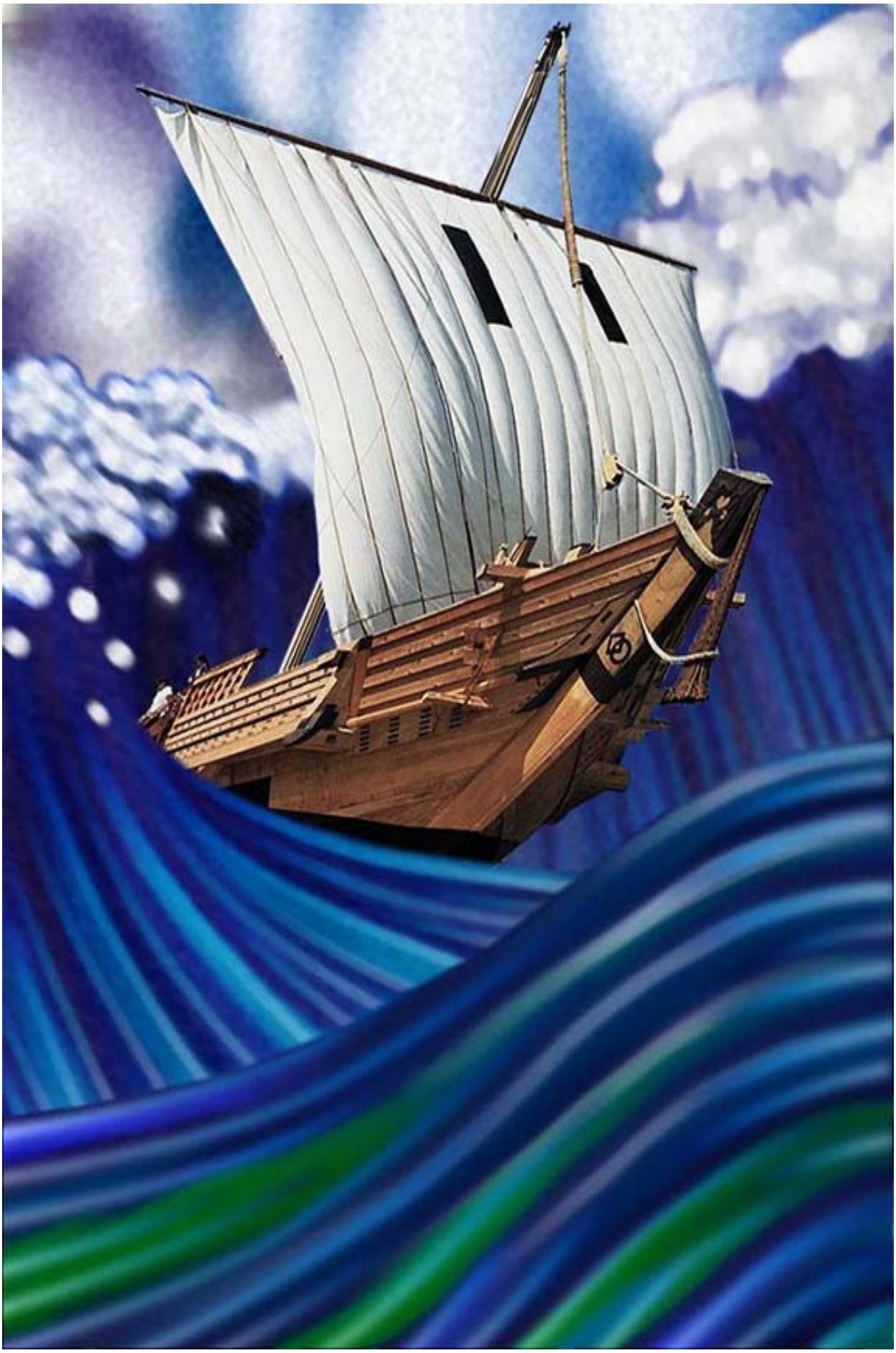
ここ八橋や逢束は、山陰道に倉吉までの往還が交わって、さらに、西から東から海路も整い「海と陸の交差点」なのだが、満潮を見はからい砂浜に乗り上げるか、川湊の奥に船を引き入れておかなければ、時化で簡単に船が流されてしまう。

ここから東は、見渡す限り砂浜ばかりだった。

時代が下り、大型の弁財船が大量の物資をのせ日本海を行き交い始めると、八橋陣屋の下まで堀り広げた川みなとが手狭になってしまっていた。

「赤碕の方なら、西の御崎（みさき）が波風を弱めてくれ、海底も岩だからイカリも効くぞ」

「漁師たちが小さな波止を作っちゃあいるが…　赤碕は崖が迫って岸辺が無い。　さて、どんなもんだかなあ…」



「あ～あ、大きな波止場さえ作れれば、時化でも大船が流されたりしねえんだがよお～」

十万人以上が焼け死んだといわれる大火があった。

江戸の街の大半が焼け野原となり、江戸城さえも焼けたと聞く。

鳥取藩の江戸上屋敷も全焼。

木材が不足してしまい、どこの藩でも国許から木を切り出し、せっせと江戸へ運んでいるようだ。

「大庄屋の河本様が、大山の赤松を切り出し、お江戸に運ぶよう殿様から仰せつかったんだといや」

「ああ、そりゃあ、堀尾長兵衛旦那だわい、弟の河本甚右衛門さんと二人やで泉州堺の弁財船を買うそうだがな、大きな港も要るだらあなあ～」

「海の岩や石をさらえて波止場を積み上げるらしい、どえらい大仕事になるぞお～」

「おい、わしらも長兵衛旦那に雇って貰わいや！」

そんなこんなで、海の中に桟橋のような波止場が築かれると、その後何年も何年もかかって、ついに立派な「菊港」が出来上がった。

この港には、鳥取藩の藩米を運ぶ弁財船や北前船が停泊し、赤碕の港は大いに賑わった。

崖下にある港の岸には石垣をめぐらし廻船問屋や宿屋、商店などが立ち並んだ。

港を見守る丘の上には、繁栄を祈る人々が「神崎神社」を建て、その縁日には街道が人で埋め尽くされるほどだ。

どの家もどの家も、戸や障子を開け放し縁起物や餅や酒を売る声で賑やかだ。

山陰に鉄道がやって来た頃のこと、そんな港に「林子（りんこ）」という少女が暮していた。

父が亡くなり、残された母が再婚したので、旅館に嫁いだ叔母のもとで育てられた。

商談や船乗りたちの宴で賑やかな旅館の中で育ったが、林子の心は満たされなかった。

「いつかこの田舎の港町を出て、一人で生きぬこう！」

全国に張り巡らされた鉄道から、珍しい品物や、着飾った人達がやって来る。

そんな目新しい物に触れるにつけ、林子は遠い東京の目覚ましい発展に心惹かれていた。

女学校を出たとたん、林子は家出をするかのように家を飛び出し、独り憧れの東京へと旅立った。

その東京で神学部に通う長谷川仁（じん）と出会い所帯を持つと、二人は友人の弟の描く洋画を売り歩くようになる。

これが、今では銀座で老舗の「日動画廊」の起こりとなるのだった。

月日が経ち、「日動画廊」は、フランスのパリにも支店が出来た。

福岡支店、名古屋支店、仁の生まれ故郷の笠間には美術館を建てるほどの繁盛ぶり。

アメリカに留学した三男の徳七が社長となって画廊をますます発展させると、林子は赤碕の海を見下ろす高台の墓へ参るため、ときどき帰郷するようになっていた。

日動画廊

「ああ、ここが私の生まれ故郷なんだわ」

郷愁なのか、かつて毎日眺めてはため息ついた鉛色の日本海をあらためて望み、大成功した自分の人生を振り返っては、故郷を飛び出した若い日を思う。

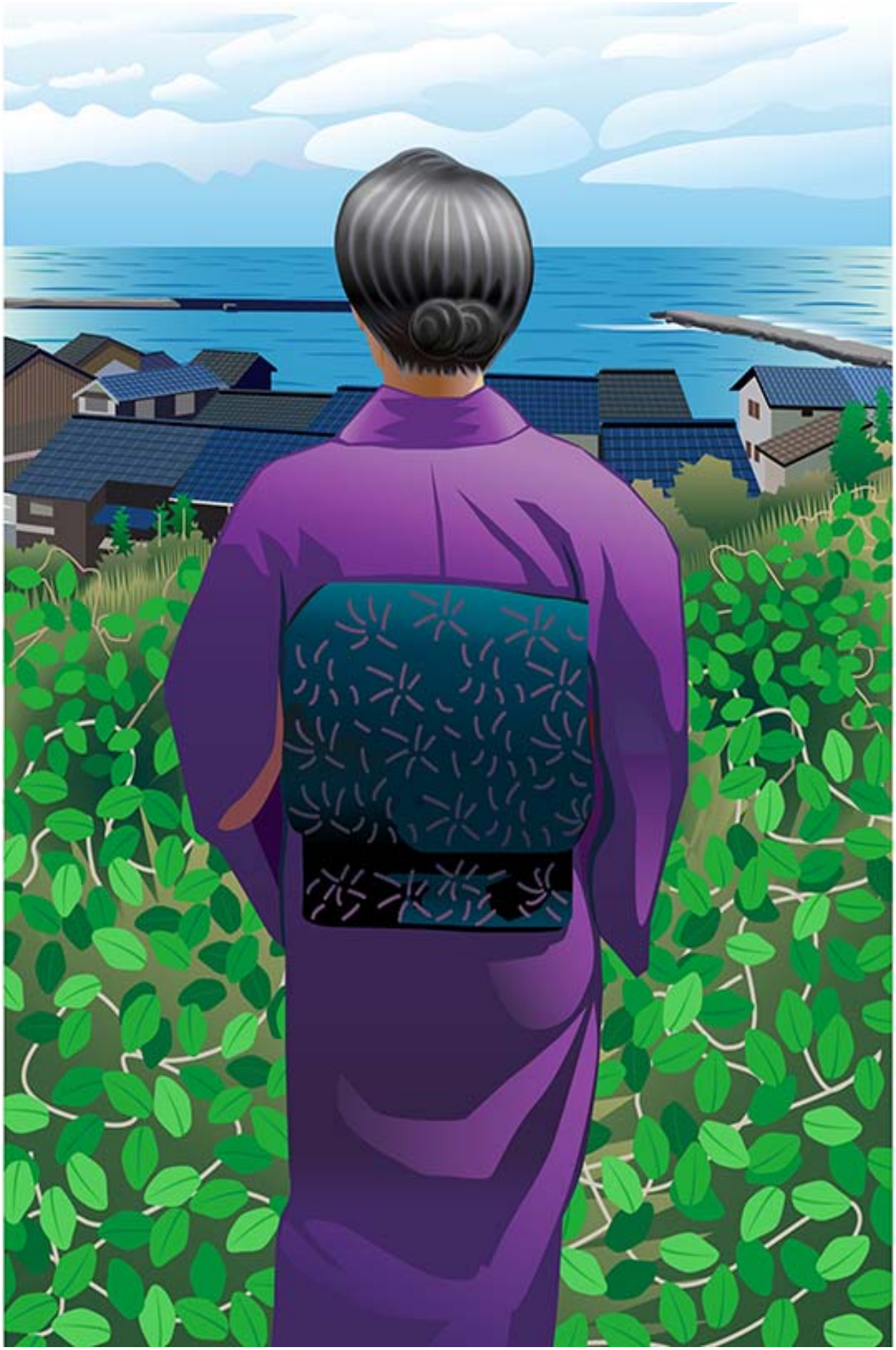
「思えば、なんと遠くまで…　ひょっとして、自分にも荒波に船を乗り出す北前船の船頭の気質が備わっていたのだろうか？」

昭和の終わりにそんな林子とともに墓参りを重ねた徳七は、林子が亡くなった今でも毎年、妻の智恵子と母の生まれた家のお墓参りを欠かさない。

徳七は、母である林子の故郷に、なにか記念になるものを残したいという思いが湧き上がって来た。

父の故郷の笠間の美術館では、付き合いのあった絵描き達のパレットを展示している。

それはまさに、「日動画廊の歩み」親子二代、そして、長谷川仁と林子夫婦の歴史そのものだった。



「なにか、赤碕の人たちが地元を誇れるような記念碑を、この地に…」

いつしか、その思いは彼の心の中で夢から信念に変わっていった。

「ならば、この北前船の港に夢を抱き出帆する旅人の石像を造ってはどうだ！」

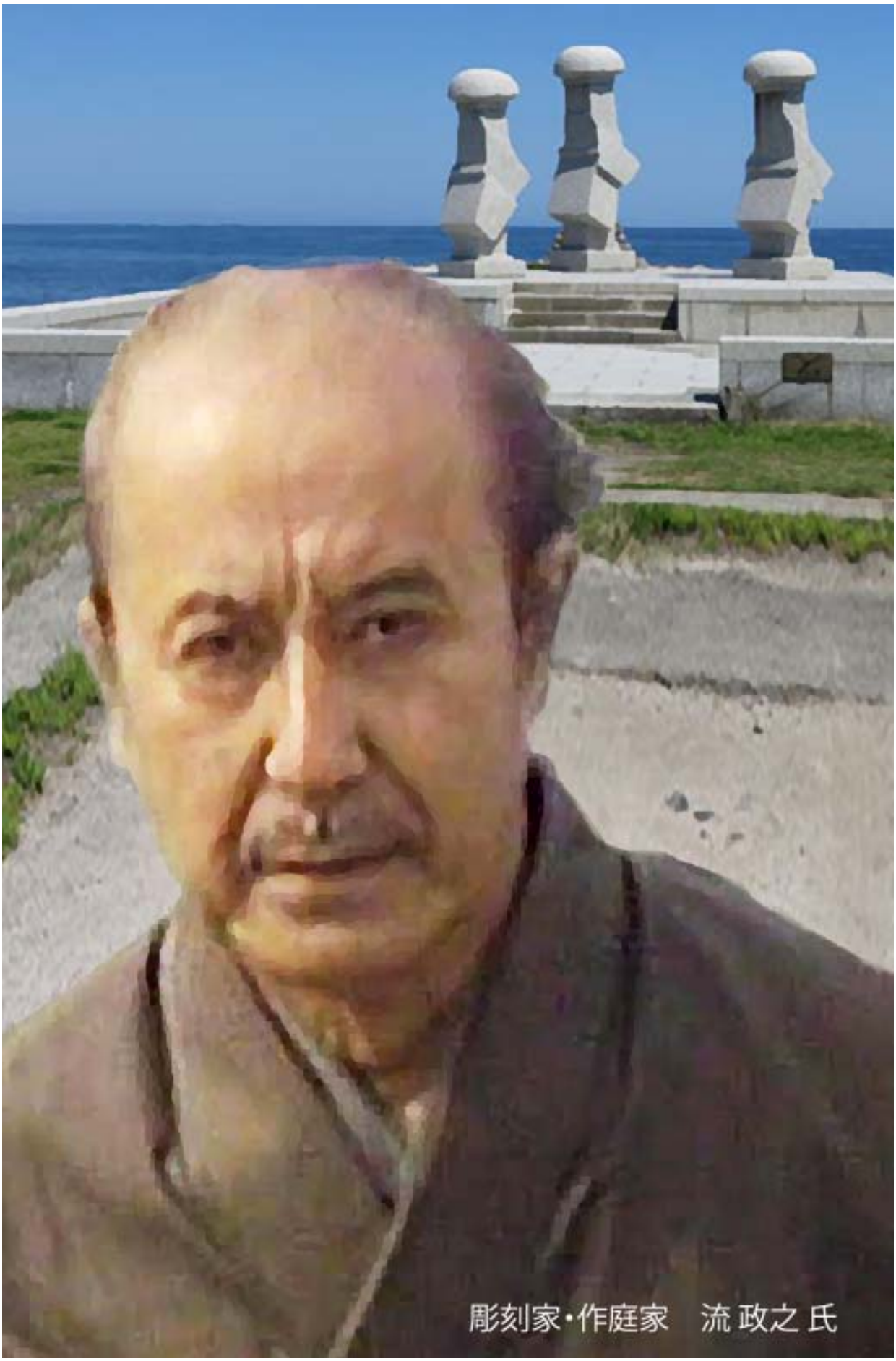
そう提案したのは、世界的に有名な彫刻家で、ホテルなどの庭園作りも手がける「流 政之（ながれまさゆき）」だった。

ニューヨークのワールド・トレードセンターの中庭にモニュメント「雲の砦」を作ったり、政之自身が特攻隊の生き残りであることから、平和を願い各地に「防人（サキモリ）」シリーズの彫刻を設置したりしている。

「しかし、文化遺産でもあり、港湾関係は何かと難しくはないのか？」

「とにかく、この眠ったような町が全国に誇れるものは、千石船が旅立ったこの港や船上山合戦の歴史だけなんだから、やるだけやってみよう！」

二人は、その熱い思いを形にするべく、赤碕の地を何度も訪れ構想を練っていった。


彫刻家・作庭家　流 政之 氏

モニュメントは三基。

道中合羽に三度笠姿の若者達が、行く手に待ち受ける様々な出来事に胸を躍らせ、遠い蝦夷地を見つめている。

町職員の尻を叩き励まし、幾多の困難を克服し、制作費は、町と作者そして日動画廊で三等分と決めた。

実際はかなり赤字が出て、けっきょく長谷川が補填するのだが・・・

ついに平成元年、彫刻「波しぐれ三度笠」が出来上がった。

江戸期の石組み堤防をそのままに残す菊港の「波止」の先に、白御影石造りの三度笠に旅姿の石像が並んだ。

除幕式では流政之も長谷川徳七も羽織袴の晴れ姿で、日本海から吹き付ける強風のなか町のみんなも満面の笑みだった。

「この田舎の朽ち果てそうな町並みよ！　どうか、もう一度旅立ちの決意を胸に、新しい時代へ船出していってくれー！」

1995年 鳥取県景観大賞受賞
「波しぐれ三度笠」　流 政之 作

長谷川徳七・智恵子 御夫妻

株式会社 日動画廊
代表取締役社長　長谷川徳七 氏

全国洋画商連盟会長、全国美術商連合会会長を歴任。

1979年 芸術文化勲章オフィシェ、1998年 芸術文化勲章コマンドールをそれぞれフランス政府より受賞。

株式会社日動画廊は、東京銀座5丁目の日動画廊本店の他に、名古屋日動画廊（名古屋市中区）、福岡日動画廊（福岡市中央区）、軽井沢日動画廊（GW・夏季のみ）、Galerie Nichido Paris（パリ）、nichido contemporary art（東京都港区六本木7丁目）があり多くの美術愛好家に親しまれている。